

FUJIFILM

Value from Innovation

富士フイルムホールディングス株式会社

2025年3月期第1四半期決算説明会

2024年8月7日

イベント概要

[企業名]	富士フイルムホールディングス株式会社		
[企業 ID]	4901		
[イベント言語]	JPN		
[イベント種類]	決算説明会		
[イベント名]	2025 年 3 月期 第 1 四半期決算説明会		
[決算期]	2025 年 3 月期 第 1 四半期		
[日程]	2024 年 8 月 7 日		
[ページ数]	31		
[時間]	16:00 – 16:54 (合計：54 分、登壇：22 分、質疑応答：32 分)		
[開催場所]	インターネット配信		
[会場面積]			
[出席人数]			
[登壇者]	5 名		
	代表取締役社長・CEO	後藤 禎一	(以下、後藤)
	取締役・CFO	樋口 昌之	(以下、樋口)

取締役 / 富士フイルムビジネスイノベーション株式会社

代表取締役社長・CEO 浜 直樹 (以下、浜)

取締役執行役員 コーポレートコミュニケーション部長 兼 ESG 推進部長

吉澤 ちさと (以下、吉澤)

富士フイルム株式会社 取締役・執行役員 ライフサイエンス戦略本部長

兼 バイオ CDMO 事業部長 飯田 年久 (以下、飯田)

登壇

司会：定刻となりました。ただいまより富士フイルムホールディングス株式会社 2025 年 3 月期第 1 四半期決算説明会を開催いたします。本日はお忙しい中、当社の説明会にご参加いただき、誠にありがとうございます。

本日の出席者を紹介いたします。富士フイルムホールディングス株式会社代表取締役社長・CEO、後藤禎一でございます

後藤：よろしくお願いいたします。

司会：富士フイルムホールディングス株式会社取締役・CFO、樋口昌之でございます。

樋口：樋口でございます。よろしくお願いいたします。

司会：富士フイルムホールディングス株式会社取締役、富士フイルムビジネスイノベーション株式会社代表取締役社長・CEO、浜直樹でございます。

浜：浜です。よろしくお願いいたします。

司会：富士フイルムホールディングス株式会社取締役執行役員、コーポレートコミュニケーション部長兼 ESG 推進部長、吉澤ちさとでございます。

吉澤：吉澤でございます。よろしくお願いいたします。

司会：富士フイルム株式会社取締役執行役員、ライフサイエンス戦略本部長兼バイオ CDMO 事業部長、飯田年久でございます。

飯田：飯田でございます。よろしくお願いいたします。

司会：私は本日の司会を務めます、コーポレートコミュニケーション部の長澤と申します。どうぞよろしくお願いいたします。

2025年3月期 第1四半期

1 | 決算ハイライト及びトピックス
富士フイルムホールディングス株式会社 代表取締役社長・CEO **後藤禎一**

2 | 連結業績及び事業概況
富士フイルムホールディングス株式会社 取締役・CFO **樋口昌之**

2025年3月期

3 | 連結業績予想
富士フイルムホールディングス株式会社 取締役・CFO **樋口昌之**

本日の説明会の流れは、まず後藤より、決算ハイライト及びトピックスについて説明いたします。続いて樋口より、連結業績及び事業概況、2025年3月期の連結業績予想について説明いたします。その後、質疑応答を行います。

それでは後藤より説明いたします。

2025年3月期 第1四半期 決算ハイライト

2025年3月期 第1四半期 連結業績

(為替レート：米ドル=156円，ユーロ=168円)

売上高
過去最高
7,490 億円
対前年 (↑+13.4%)

営業利益
過去最高
622 億円
(↑+19.1%)

当社株主帰属
四半期純利益
過去最高
607 億円
(↑+11.6%)

- 売上高、営業利益、当社株主帰属四半期純利益はいずれも過去最高を更新
- 売上高は、イメージング、半導体材料及びメディカルシステムの販売好調や、為替影響により増収
- 営業利益は、販売好調のエレクトロニクス、イメージングが、一時費用増加等により減益となったヘルスケアをカバー、為替影響等も寄与し増益

2025年3月期 通期連結業績予想

(為替レート：2-4Q 米ドル=145円 | 対前回+5円，ユーロ=160円 | 対前回+10円)
(為替レート：通期 米ドル=148円 | 対前回+8円，ユーロ=162円 | 対前回+12円)

売上高
過去最高
31,500 億円
対前回予想(2024/5/9) (↑+500億円)

営業利益
過去最高
3,150 億円
(↑+150億円)

当社株主帰属
当期純利益
過去最高
2,500 億円
(↑+100億円)

- 通期連結業績予想は、バイオCDMOの一時費用増加等によるヘルスケアの下方修正を、業績好調なエレクトロニクス及びイメージングの上方修正、及び、通期為替前提の見直し等でカバーし、売上高・営業利益・当社株主帰属当期純利益いずれも過去最高の更新を目指す
- 年間配当は、15期連続増配となる60円/株を予定

FUJIFILM Holdings Corporation 4

後藤：後藤です。まず私から富士フイルムホールディングスの2025年3月期第1四半期連結決算の概要をご説明いたします。

第1四半期の売上高は7,490億円、営業利益は622億円、当社株主帰属四半期純利益は607億円となりました。売上高、営業利益、当社株主帰属四半期純利益ともに過去最高を更新いたしました。

売上高は、イメージング、半導体材料及びメディカルシステムの販売好調や、為替影響もあり、増収となりました。

営業利益は、販売好調のエレクトロニクス、イメージングが、一時費用増加等により減益となったヘルスケアをカバーし、為替影響等も寄与し増益となりました。

2025年3月期の通期連結業績予想は、第2四半期以降の為替前提を見直し、売上高は前回予想から500億円増の3兆1,500億円とします。

営業利益につきましては、バイオCDMOの一時費用増加等によるヘルスケアの下方修正を、業績好調なエレクトロニクスとイメージングの上方修正、及び通期為替前提の見直し等でカバーし、

前回予想から 150 億円増の 3,150 億円。当社株主帰属当期純利益は 100 億円増の 2,500 億円に上方修正します。

中期経営計画 VISION2030 の初年度に当たる当年度に、売上・利益ともに過去最高の更新を目指して、全社一丸となって取り組んでまいります。

2025 年 3 月期の年間配当は、前回お伝えしましたとおり、15 期連続増配となる 60 円を予想します。

決算ハイライト

ハイライト

トピックス

2025年3月期
第1四半期

2025年3月期予想

参考資料

2025年3月期 第1四半期 決算トピックス

エレクトロニクス

3つの事業部門の統合と、当該ディビジョナル・ラボ*の統合を実施し、既存事業の利益を最大化させるとともに、エレクトロニクス領域の新規材料事業創出を強化・加速する

*ディビジョナル・ラボ：ビジネスに直結した研究開発を行う組織



FUJIFILM Holdings Corporation 5

次に第1四半期のトピックスを三つお話しします。

まず一つ目は、エレクトロニクスにおける組織再編についてです。

6月27日付けでエレクトロニクスセグメントにおけるディスプレイ材料事業、産業機材事業、ファインケミカル事業を統合し、アドバンストファンクショナルマテリアルズ事業部を新設しました。また、これにあわせてディスプレイ材料研究所と高機能材料研究所の二つのディビジョナル・ラボを統合し、アドバンストファンクショナルマテリアルズ開発センターを新設いたしました。

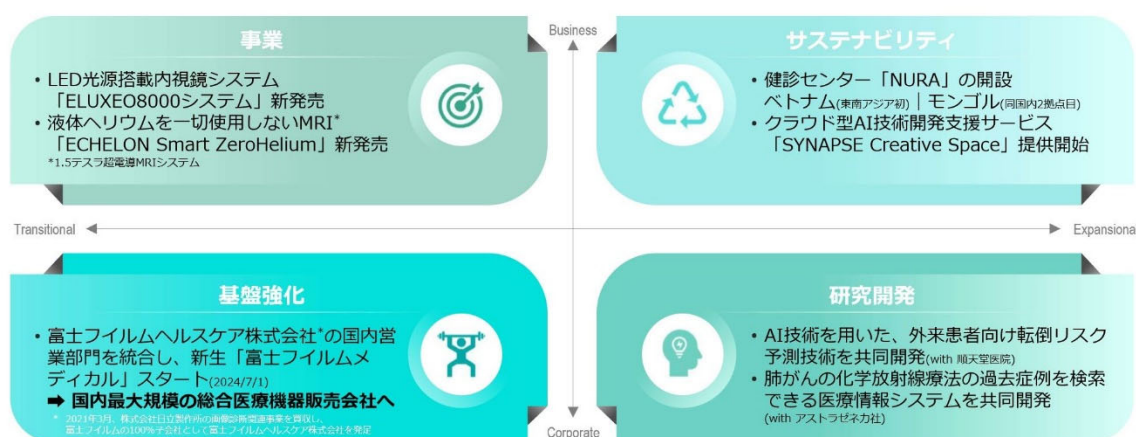
統合のねらいは二つあります。一つ目は既存事業の利益最大化です。各事業の人材・ビジネス資産を一元化し、近接領域での相乗効果を創出するとともに、積極的な人材ローテーションにより、強い人材を育成します。二つ目は新規材料事業創出の強化・加速です。各事業が持つコア技術・ビジネス構築力の知見・知識を共有化し、事業創出の総合力を強化します。

この二つを実現することで、グループ全体の成長につながる新規事業創出にリソースをシフトし、ヘルスケアと並んで、当社の成長ドライバーであるエレクトロニクス領域の成長を加速させ、売上・利益の最大化を図ります。

2025年3月期 第1四半期 決算トピックス

メディカルシステム

独自技術を生かし、さまざまな医療現場のニーズに応える幅広い製品・サービスの提供を通じて、さらなる診断の効率化と医療の質の向上、人々の健康の維持・増進に貢献していく



二つ目は、メディカルシステムについてお話しします。

メディカルシステム事業は、前中期経営計画 VISION2023 の重点課題として取り組んできたグループシナジーの拡大と IT・AI 技術の活用による付加価値向上の成果により、売上・利益ともに大幅な成長を実現することができました。

VISION2030 においても、独自技術を活かし、さまざまな医療現場のニーズに応える幅広い製品・サービスの提供を通じて、さらなる診断の効率化と医療の質の向上、人々の健康維持・増進に貢献すべく、今年度にこれまで取り組んだことをまとめたのが本スライドでございます。

内視鏡やMRIなど、既存製品の付加価値向上による事業の拡大。昨年発表のとおり、7月1日に富士フィルムヘルスケアの国内営業部門を統合し、事業戦略から研究開発、製造までを一貫させることによる経営基盤の強化。病気の早期発見による死亡率や重症化リスクの抑制を目指し、新興国での健診センターNURAの展開、及び希少疾患をはじめ、さまざまな疾病を対象とした画像診断支援AI技術の開発促進への期待に応えるSYNAPSE Creative Spaceの展開など、新事業の拡大。将来の新たなビジネスに向けた基礎研究への取り組み。

今後もそれぞれの分野での活動を継続し、持続的成長を実現させていきます。

2025年3月期 第1四半期 決算トピックス

ビジネスイノベーション

創業当初より環境保全の重要性を認識し、企業活動における環境負荷低減に取り組んできた当社は、高い省エネルギー性能とお客様の使いやすさを両立する環境技術開発を推進。今後も持続可能な未来の実現を目指す。

環境への取り組み

環境と採算を両立できるビジネスモデルの追求

- 1995年 ① 全社リサイクル方針「限りなく『廃棄ゼロ』を目指し、資源の再利用を推進する」を制定
- 1996年 ② 国内生産の複合機へリユースパーツの投入を開始
- 2000年 ③ 日本の業界初の廃棄ゼロ(再資源化率99.5%以上)を達成

2024年

- 1  **Circular Manufacturing Centerをオランダに開設**
欧州地域での資源循環を促進する生産拠点、トナーカートリッジの回収・再生からスタート 2024/5公表
- 2  **環境問題や複合機技術を分かりやすく学び、サステナブルな地球の未来を探究する体験型施設「Green Park FLOOP」開設** 2024/6公表
- 3  **資源循環の促進に貢献する再生機「ApeosPort-VII CR」シリーズ発売**
回収した使用済み商品から取り出した部品を再生技術によりリユース活用し、資源として循環させる「クローズド・ループ・システム」を推進 2024/7公表

三つ目は、ビジネスイノベーションにおける環境への取り組みについてお話しします。

富士フィルムビジネスイノベーションは、創業当初より環境保全の重要性を認識し、サステナブル社会の実現に貢献する企業を目指し、資源循環の促進や気候変動への対応などに取り組んでいます。

ここでは第1四半期の具体的な取り組みを三つご紹介します。1点目は、オランダの当社生産子会社の敷地内に、欧州地域での資源循環を促進する生産拠点 Circular Manufacturing Center を開設、6月より稼働しました。2点目は、横浜みなとみらい事業所内に、サステナブルな地球の未来

を採求する体験型施設 Green Park FLOOP を 6 月に開設しました。3 点目は、資源循環の促進と気候変動への対応へ貢献する、A3 カラー複合機 ApeosPort-VII C R シリーズの再生機 6 機種を、7 月に発売しました。

こうした活動に加えて、多様な働き方を可能にするソリューションの提供により、人や物の移動を減らすことでも環境負荷低減に貢献しています。当社は今後も環境と採算を両立できるビジネスモデルを追求しながら、持続可能な社会の実現に取り組みます。

私からの説明は以上でございます。

司会：続きまして、樋口より説明いたします。

2025年3月期 第1四半期 業績 (2024年4月～2024年6月)

(単位：億円)

	1Q				
	2024年3月期	2025年3月期	対前年度	為替影響	為替影響除く
売上高	6,608 100.0%	7,490 100.0%	882 +13.4%	513	369 +5.6%
営業利益	522 7.9%	622 8.3%	100 +19.1%	133	-33 -6.3%
税金等調整前四半期純利益	693 10.5%	717 9.6%	24 +3.5%	156	-132 -19.0%
当社株主帰属四半期純利益	544 8.2%	607 8.1%	63 +11.6%	109	-46 -8.3%
EPS	45.22円	50.44円	5.22円	<その他増減要因 (対前年度)> 営業利益における 原材料価格影響： -37億円 (半導体等の部材価格は含まず)	
為替 ：米ドル	138円	156円	18円安		
：ユーロ	150円	168円	18円安		

樋口：続きまして、樋口より連結業績及び事業概況についてご説明申し上げます。

2025年3月期第1四半期の業績です。

売上高は、イメージングと半導体材料の販売好調や為替の円安影響により、前年比 13.4%増の 7,490 億円となりました。

営業利益は、イメージングや半導体材料の増益や為替の円安影響などで、前年比 19.1%増の 622 億円となりました。

当社株主帰属四半期純利益は、営業利益の増加に加え、為替差損益の計上などにより、前年比 11.6%増の 607 億円となりました。

決算ハイライト 2025年3月期 第1四半期 全社 セグメント別 BS CF 2025年3月期予想 参考資料

2025年3月期 第1四半期(2024年4月～2024年6月)
セグメント別 連結売上高 | 営業利益

(単位: 億円)

売上高	1Q		対前年度	為替影響除く	
	2024年 3月期	2025年 3月期			
ヘルスケア	2,068	2,292	224 +10.8%	45	+2.2%
エレクトロニクス	791	1,091	300 +37.9%	222	+28.2%
ビジネスイノベーション	2,697	2,800	103 +3.9%	-38	-1.4%
イメージング	1,052	1,307	255 +24.2%	140	+13.2%
合計	6,608	7,490	882 +13.4%	369	+5.6%

営業利益	1Q		対前年度	為替影響除く	
	2024年 3月期	2025年 3月期			
ヘルスケア	103	34	-69 -67.1%	-105	-101.5%
エレクトロニクス	98	201	103 2.1倍	79	+80.8%
ビジネスイノベーション	166	144	-22 -12.9%	-42	-24.9%
イメージング	234	325	91 +38.9%	37	+16.1%
全社/連結調整	-79	-82	-3	-2	
合計	522	622	100 +19.1%	-33	-6.3%

* グラフィックコミュニケーション事業を「エレクトロニクス(旧マテリアルズ)」セグメントから「ビジネスイノベーション」セグメントに組み替えて表示しています。また、それに伴いセグメント単位での一律減価が繰り下げられ、各セグメントの売上高及び営業利益をセグメント間取引消去後の金額に変更しております。本区分変更を含む、2024年3月期の情報をリスタートしています。

FUJIFILM Holdings Corporation 10

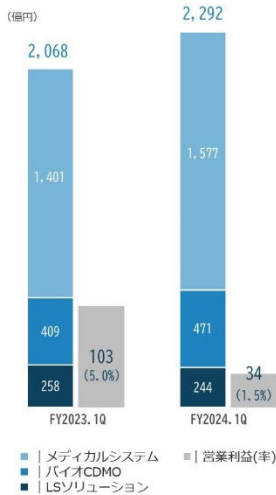
セグメント別の売上高・営業利益はご覧のとおりでございます。

ヘルスケアにつきまして、メディカルシステムの好調な販売、バイオ CDMO のデンマーク拠点における抗体医薬品の製造受託が堅調に推移したことにより、増収となりましたが、営業利益は減益となりました。

バイオ CDMO において、計画しておりました中小型製造設備を対象とした構造改革費用 50 億円に加えまして、新たに米国テキサス拠点における、商用製造拡大に向けた体制強化を進めるための対応費用 60 億円を計上したことが、減益の主な要因です。

2025年3月期 第1四半期(2024年4月～2024年6月)
セグメント別概況：ヘルスケア

対前年比
売上高 ↑+10.8%
営業利益 ↓-67.1%



売上高は、メディカルシステム、バイオCDMOにおいて増収。営業利益は、バイオCDMOの中小型設備を対象とした構造改革費用や、米テキサス拠点での商用製造拡大に向けた体制強化費用等の計上により減益

- メディカルシステム** 売上高 1,577 億円 (対前年 +12.6%)
 - 内視鏡、CT/MRI等の販売が好調に推移し、増収。内視鏡では、米国・欧州等の主要市場で販売が伸長。CT/MRIでは、米国・欧州・中南米での販売が好調に推移
 - 富士フイルムヘルスケア株式会社の国内営業部門を統合、新生「富士フイルムメディカル」スタート
- バイオCDMO** *収益性：28ページ参照 売上高 471 億円 (対前年 +15.2%)
 - 大型製造設備では、抗体医薬品の製造受託がデンマーク拠点にて堅調に推移
 - 市況停滞の影響を受けている中小型製造設備では、2024年度第1四半期に計画通り構造改革を実施し、需要状況に応じた生産体制を再構築
 - 米テキサス拠点の中小型製造設備において、需要増が見込まれる商用品の製造受託拡大に向け、レギュラトリー対応力向上を目的とした品質保証システム強化策や安定生産実現のためのシステムアップグレード等のため、設備の一時停機を実施。それに伴う稼働損や対応費用を計上
- LSソリューション** 売上高 244 億円 (対前年 -5.7%)
 - ライフサイエンスは、培地の前年同期における、原材料需給ひっ迫問題の改善に伴う出荷増の反動による減収を、販売が好調だった細胞の増収等でカバーし、前年並みを維持
 - コンシューマーヘルスケアは、市場全体が停滞したサプリメントの販売減少等により、減収

そのヘルスケア事業でございます。

メディカルシステム、バイオCDMOにおいて増収を確保したことにより、売上高は前年比10.8%増の2,292億円。営業利益はバイオCDMOの中小型製造設備における構造改革費用の計上や、米国テキサス拠点の商用製造拡大に向けた体制整備費用などの計上により減益となり、前年比67.1%減の34億円となりました。

メディカルシステムは、内視鏡、CT/MRIなどの販売が好調に推移し、売上が増加しました。内視鏡は、米国・欧州をはじめとする主要市場で販売が伸長。CT/MRIは、米国・欧州・中南米の販売が伸長したことなどにより好調に推移しました。

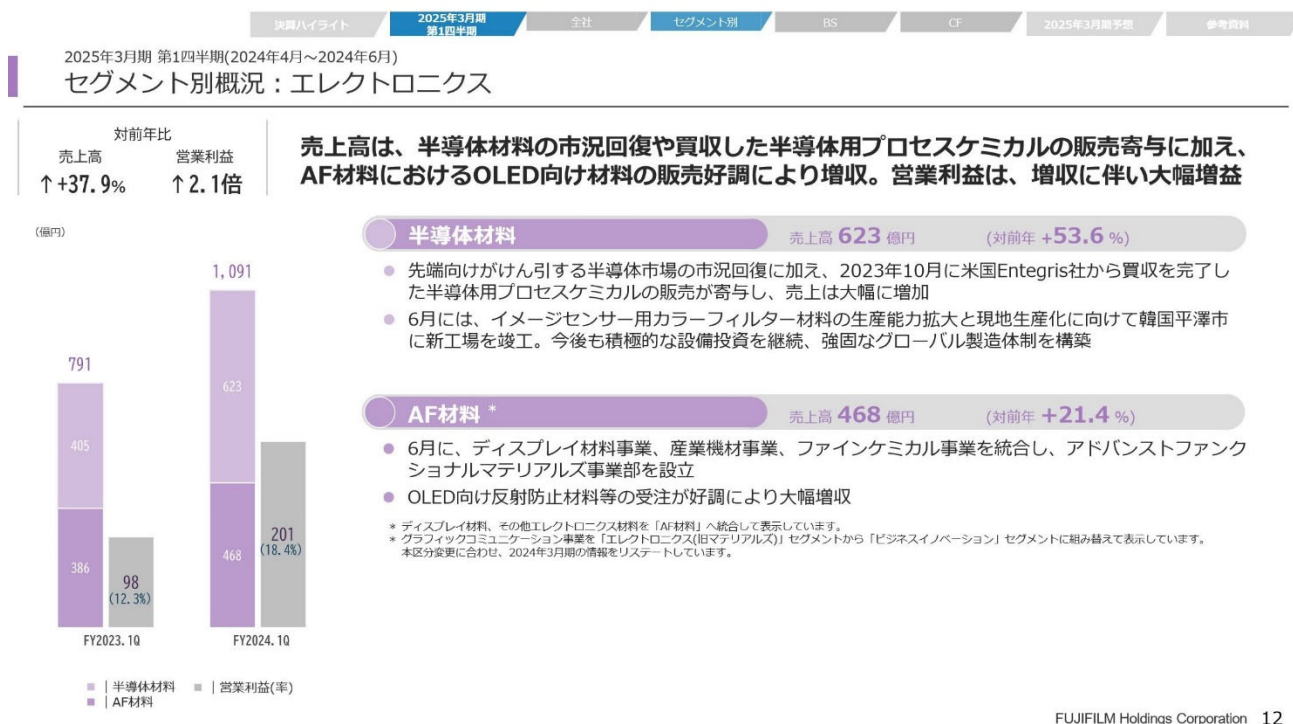
バイオCDMOは、抗体医薬品の製造受託がデンマーク拠点を中心に堅調に推移したことにより、売上が増加しました。一方、市況停滞の影響を受けた中小型製造設備では、計画どおりに第1四半期に構造改革を実施し、需要状況に応じた生産体制の再構築を進めています。

また、米国テキサス拠点の中小型製造設備においては、需要増が見込まれる商用品の製造受託拡大に向け、レギュラトリー対応力向上を目的とした品質保証システム強化や、安定生産実現のため

のシステムアップグレードなどのため、設備の一時停機を実施し、これに伴う稼働損や対応費用を計上しました。

なお、バイオ CDMO の収益性についての説明を 28 ページ目に掲載いたしましたので、ご参照ください。

LS ソリューションは、ライフサイエンスが、培地の前年同期における原材料需給ひっ迫問題の改善に伴う出荷増の反動による減収を、販売が好調だった細胞の増収などでカバーした一方、コンシューマーヘルスケアが、市場全体の停滞を受けてサプリメントの販売が減少したことなどにより、減収となりました。



次にエレクトロニクスです。

半導体材料の市況回復や買収した半導体用プロセスケミカルの販売企業に加え、AF 材料における OLED 向け材料の販売好調により、売上高は前年比 37.9%増の 1,091 億円、営業利益は増収に伴い、前年比 2.1 倍の 201 億円となりました。

半導体材料は、先端向け半導体がけん引する市況回復の影響に加えて、2023 年 10 月に米国 Entegris 社からの買収を完了した半導体用プロセスケミカル事業が寄与し、売り上げが大幅に増加

しました。本年6月には、イメージセンサー用カラーフィルター材料の生産能力拡大と現地生産化に向けて、韓国平澤市に新工場を竣工いたしました。今後も積極的な設備投資を継続し、強固なグローバル製造体制を構築いたします。

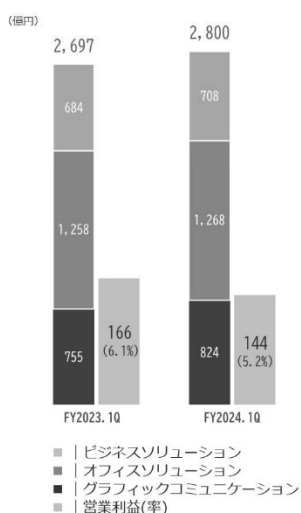
ディスプレイ材料とその他エレクトロニクス材料を統合したAF材料は、OLED向け反射防止材料の受注好調などにより大幅な増収となりました。

2025年3月期 第1四半期(2024年4月～2024年6月)

セグメント別概況：ビジネスイノベーション

対前年比
売上高 ↑+3.9%
営業利益 ↓-12.9%

**売上高は、DX関連ソリューション、インクジェットヘッド等の販売増加により増収。
営業利益は、新製品等の開発経費や人件費の増加等の影響により減益**



- ビジネスソリューション** 売上高 **708** 億円 (対前年 +3.5%)
 - DX関連ソリューションの販売が増加したこと等により、増収
 - 中堅・中小企業の柔軟な働き方を支援するセキュアな無線ネットワークサービス「beat air」を提供開始。IT人材が不足するお客様に代わり、IT環境の構築と運用管理を行うことで、オフィス環境構築をサポート
- オフィスソリューション** 売上高 **1,268** 億円 (対前年 +0.7%)
 - 在庫調整が進んだ欧米向け消耗品の輸出増等により、増収
 - コニカミノルタ株式会社と原材料および部材調達の連携を図る合併会社の設立を決定し、7月8日に株主間協定書を締結。両社が保有する幅広いサプライヤーネットワークを活用し、商品の強固な供給体制の構築や業務プロセスの効率化など、事業基盤の強化を推進
- グラフィックコミュニケーション** 売上高 **824** 億円 (対前年 +9.4%)
 - 米国向け刷版の販売増に加え、欧米向けのデジタルプリンターの販売増、セラミック市場・商業印刷市場向けのインクジェットヘッドの販売増等により、増収
 - 世界最大級の国際印刷・メディア産業展“drupa 2024”において、オフセット印刷からデジタル印刷、印刷ワークフローに関するDXソリューションまでの様々なラインナップを展示し、グループの総合力を全世界へ訴求

* グラフィックコミュニケーション事業を「エレクトロニクス(旧マテリアルズ)」セグメントから「ビジネスイノベーション」セグメントに組み替えて表示しています。本区分変更に合わせて、2024年3月期の情報をリセットしています。

続いてビジネスイノベーションの業績概要です。

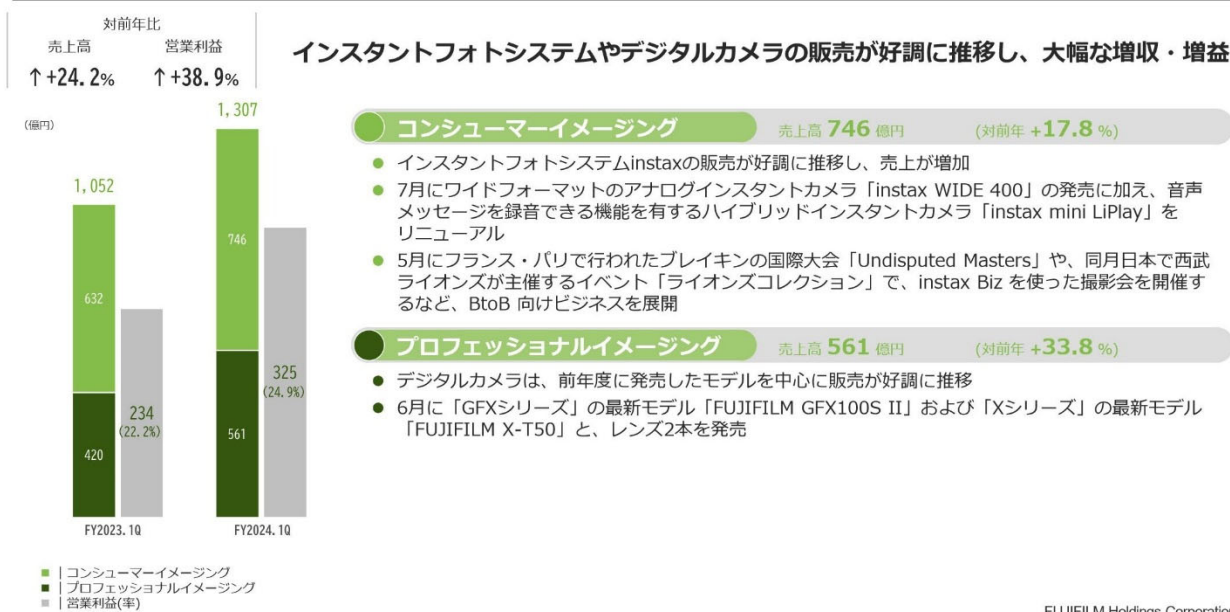
DX関連ソリューションやインクジェットヘッドなどの販売増加により、売上高は前年比3.9%増の2,800億円と、増収となりました。一方、営業利益は新製品などの開発経費や人件費の増加などの影響により、前年比12.9%減の144億円となりました。

ビジネスソリューションは、DX関連ソリューションの販売が増加したことなどにより、売り上げが増加しました。中堅・中小企業の柔軟な働き方を支援するセキュアな無線ネットワークサービスbeat airの提供を開始し、IT人材が不足するお客様に代わり、IT環境の構築と運用管理を行うことで、オフィス環境構築のサポートに貢献します。

オフィスソリューションは、在庫調整が進んだ欧米向け消耗品の輸出増などにより、売り上げが増加しました。コニカミノルタ株式会社と、原材料および部材調達の連携を図る合弁会社の設立を決定し、7月8日に株主間協定書を締結いたしました。両者が保有する幅広いサプライヤーネットワークを活用し、商品の強固な供給体制の構築や、業務プロセスの効率化など、事業基盤の強化を推進します。

グラフィックコミュニケーションは、米国向け刷版の販売増に加え、欧米向けのデジタルプリンターの販売増、セラミック市場・商業印刷市場向けのインクジェットヘッドの販売増などにより、対前年増収となりました。また、世界最大級の国際印刷・メディア産業展 drupa 2024 において、オフセット印刷からデジタル印刷、印刷ワークフローに関する DX ソリューションまでのさまざまなラインナップを展示し、グループの総合力を全世界へ訴求いたしました。

2025年3月期 第1四半期(2024年4月～2024年6月)
セグメント別概況：イメージング



最後にイメージングの業績概要です。

インスタントフォトシステムやデジタルカメラの販売が好調に推移し、売上高は前年比 24.2%増の 1,307 億円、営業利益は前年比 38.9%増の 325 億円と大幅な増収増益を達成しました。

コンシューマーイメージングでは、インスタントフォトシステムの販売好調などにより売上が増加しました。インスタントフォトシステムは、従来の製品ラインナップに加え、7月にinstax WIDE 400を販売、音声メッセージを録音できる機能を有する、ハイブリッドインスタントカメラinstax mini LiPlayをリニューアルしました。また、5月にフランス・パリで行われたブレイキンの国際大会や、同月に日本で西武ライオンズが主催するイベントのライオンズコレクションで、instax Bizを使った撮影会を開催するなど、BtoB向けビジネスを展開しました。

プロフェッショナルイメージングでは、前年度に発売したモデルを中心に販売が好調に推移し、大幅な増収となりました。2024年6月には、GFXシリーズの最新モデルGFX100S II及びXシリーズの最新モデルX-T50と、レンズ2本を発売いたしました。

2025年3月期 第1四半期(2024年4月～2024年6月)

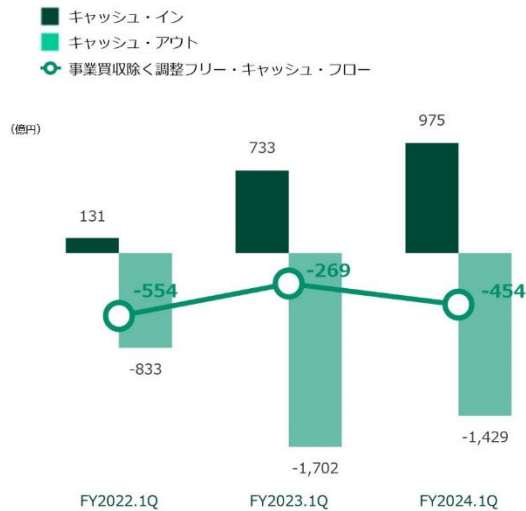
連結貸借対照表

					(単位：億円)				
	23年 3月期末	24年 3月期末	25年3月期 6月末	対24年 3月期末		23年 3月期末	24年 3月期末	25年3月期 6月末	対24年 3月期末
現金及び現金同等物	2,686	1,797	1,953	156	長短社債及び借入金	3,762	5,028	5,806	778
受取債権	6,331	6,966	6,892	-74	支払債務	3,204	3,465	3,698	233
棚卸資産	5,673	5,478	6,006	528	その他流動・固定負債	6,498	7,609	7,514	-95
その他流動資産	1,621	1,506	1,679	173	負債計	13,464	16,102	17,018	916
流動資産計	16,311	15,747	16,530	783	株主資本計	27,631	31,692	33,716	2,024
有形固定資産	9,761	13,957	15,530	1,573	非支配持分	248	41	42	1
営業権	8,583	9,538	9,863	325	純資産計	27,879	31,733	33,758	2,025
その他固定資産	6,688	8,593	8,853	260	負債・純資産合計	41,343	47,835	50,776	2,941
固定資産計	25,032	32,088	34,246	2,158	(単位：円)				
資産合計	41,343	47,835	50,776	2,941	期末日 為替レート	23年 3月期末	24年 3月期末	25年3月期 6月末	対24年 3月期末
					米ドル	134	151	161	10円安
					ユーロ	146	163	172	9円安

バランスシートについてご説明いたします。

2025年3月期6月末時点の資産合計は、有形固定資産の増加などにより、2024年3月期末時点と比べ、2,941億円増の5兆776億円となりました。負債は、916億円増の1兆7,018億円となりました。株主資本は、2,024億円増の3兆3,716億円となりました。

2025年3月期 第1四半期(2024年4月~2024年6月)
連結キャッシュ・フロー



	FY2022 1Q	FY2023 1Q	FY2024 1Q
当期純利益	414	534	609
減価償却費	351	360	397
営業債権等の増(-)減(+)	211	521	526
棚卸資産の増(-)減(+)	-625	-393	-345
営業債務等の増(+)-減(-)	-73	-64	124
運転資本の増(+)-減(-)	-487	64	305
その他	-147	-225	-336
キャッシュ・イン	131	733	975
設備投資(有形固定資産)	-498	-879	-1,186
設備投資(ソフト、レンタル資産他)	-187	-123	-243
事業の買収	-148	-700	-
キャッシュ・アウト	-833	-1,702	-1,429
調整フリー・キャッシュ・フロー(FCF)	-702	-969	-454
事業買収を除く調整FCF*	-554	-269	-454

*調整フリー・キャッシュ・フローから、事業買収を控除しています。

キャッシュ・フローについてご説明いたします。

キャッシュ・インは、当期純利益が増加した他、運転資本効率の改善などにより、前年より 242 億円増加し 975 億円となりました。

キャッシュ・アウトは、バイオ CDMO を中心とする設備投資は増加しましたが、前年には事業買収による支出がございました。従って前年より 273 億円減少し、1,429 億円となっております。

この結果、事業買収を除く調整フリー・キャッシュ・フローは 454 億円の支出となりました。

2025 年 3 月期第 1 四半期決算の説明は以上でございます。

2025年3月期 通期連結業績予想

(単位：億円)

	2024年3月期	2025年3月期 前回予想 (2024/5/9公表値)	2025年3月期 今回予想	対前年度	対前回予想
売上高	29,609 100%	31,000 100%	31,500 100%	1,891 +6.4%	500 +1.6%
営業利益	2,767 9.3%	3,000 9.7%	3,150 10.0%	383 +13.8%	150 +5.0%
税金等調整前当期純利益	3,173 10.7%	3,100 10.0%	3,300 10.5%	127 +4.0%	200 +6.5%
当社株主帰属当期純利益	2,435 8.2%	2,400 7.7%	2,500 7.9%	65 +2.7%	100 +4.2%
EPS	202.29円	199.32円	207.63円	+5.34円	+8.31円
ROE	8.2%	7.8%	7.8%	-0.4pt	-
ROIC	5.6%	5.4%	5.4%	-0.2pt	-
CCC	116日	115日	115日	-1日	-
* 為替 ：米ドル ：ユーロ	145円 157円	140円 150円	148円 162円	3円安 5円安	8円安 12円安
銀価格 (/kg)	109,000円	112,000円	151,000円	+42,000円	+39,000円

* 為替レート： 2-4Q 米ドル=145円 | 対前回+5円， ユーロ=160円 | 対前回+10円
通期 米ドル=148円 | 対前回+8円， ユーロ=162円 | 対前回+12円

* EPS(1株当たり当社株主帰属当期純利益)の算定上の基礎となる期中平均株式数については、2024年6月30日現在の発行株式数(自己株式数を除く)を使用しています。

FUJIFILM Holdings Corporation 18

続きまして 2025 年 3 月期の業績予想です。

2025 年 3 月期の通期連結業績予想は、冒頭に後藤からお伝えしましたとおり、通期為替前提を見直すとともに、足元の事業環境と各事業の業績動向を踏まえ、売上高は 3 兆 1,500 億円、営業利益は 3,150 億円、当社株主帰属当期純利益は 2,500 億円と、前回予想から引き上げ、過去最高を目指します。

セグメント別業績予想

(単位: 億円)

売上高	2024年3月期	2025年3月期 前回予想 (2024/5/9公表値)	2025年3月期 今回予想	対前回予想		為替影響除く	
				対前回	対前年	対前回	対前年
ヘルスケア	9,751	10,100	10,100	-	-	-280	-2.8%
エレクトロニクス	3,584	4,100	4,200	100	2.4%	-	-
ビジネスイノベーション	11,577	12,000	12,100	100	0.8%	-30	-0.3%
イメージング	4,697	4,800	5,100	300	6.3%	160	3.3%
合計	29,609	31,000	31,500	500	1.6%	-150	-0.5%

(単位: 億円)

営業利益	2024年3月期	2025年3月期 前回予想 (2024/5/9公表値)	2025年3月期 今回予想	対前回予想		為替影響除く	
				対前回	対前年	対前回	対前年
ヘルスケア	974	1,120	1,000	-120	-10.7%	-170	-15.2%
エレクトロニクス	463	570	720	150	26.3%	120	21.1%
ビジネスイノベーション	674	730	730	-	-	-10	-1.4%
イメージング	1,020	1,000	1,120	120	12.0%	60	6.0%
全社/連結調整	-364	-420	-420	-	-	-	-
合計	2,767	3,000	3,150	150	5.0%	-	-

* グラフィックコミュニケーション事業を「エレクトロニクス(旧マテリアルズ)」セグメントから「ビジネスイノベーション」セグメントに組み替えて表示しています。また、それに伴いセグメント単位での一部運営が進んだ状態を鑑み、各セグメントの売上高及び営業利益をセグメント間取引消去後の金額に変更しております。本区分変更に合わせて、2024年3月期の情報をリセットしています。

FUJIFILM Holdings Corporation 19

セグメント別業績予想はご覧の通りでございます。

バイオ CDMO の一時費用増加などによるヘルスケアの下方修正を、業績好調なエレクトロニクス及びイメージングの上方修正、通期為替前提の見直しなどでカバーし、売上高、営業利益、当社株主帰属当期純利益のいずれも過去最高更新を目指します。

売上高は、エレクトロニクス、ビジネスイノベーション及びイメージングセグメントを上方修正します。

営業利益は、業績好調なエレクトロニクス及びイメージングを上方修正する一方で、バイオ CDMO の、米国テキサス拠点における商用製造拡大に向けた体制強化を進めるための一時費用を、通期で 130 億円計上することや、遺伝子細胞治療薬の市況回復が想定よりも遅れていることに加え、ライフサイエンスの培地販売回復遅れ、及び原材料価格高騰影響等を織り込み、下方修正いたします。

セグメント別売上高の修正の詳細は 26 ページをご参照ください。

私からの説明は以上でございます。

質疑応答

司会 [M]：それでは質疑応答に移ります。

シティグループ証券の芝野様、よろしくお願いいたします。

芝野 [Q]：1点目は、4-6月期実績について伺えればと思います。期初の時点での社内の想定に対しての差異につきまして、ご分析をいただければと思います。会社計画比での円安によるプラスやそれ以外の上振れ下振れ、そういったところがセグメントごとなどにあれば大変助かります。

確認で、ヘルスケア CDMO の一時費用は 60 億円というコメントでよろしかったでしょうか。

樋口 [A]：まず 4-6 月期の社内計画に対する遂行でございますけれども、為替の円安影響はございましたが、ほぼ全ての事業で売上・利益ともに計画を過達したことが、一言で申し上げられることでございます。

大体、売上全体で 450 億円とか 500 億円ぐらいの過達でございますけれども、為替影響を除きましても、100 億円以上の過達になってございます。利益も 622 億円の実績に対して、為替影響とか一時費用を除きましても、全社で 100 億円以上の過達になってございます。

セグメント別に見ていきますと、まずエレクトロニクスは、先端 AI 半導体市況の急速な回復、あとディスプレイ材料にて、OLED 向けの材料が非常に好調で、売上が大きく過達になりました。その結果を受けて利益的にも非常に大きな過達でございます。

ビジネスイノベーションも、DX 関連のソリューションの販売増とか、欧米向けの消耗品の輸出の増、インクジェットヘッドの販売増で、為替影響を除いても増収増益となっております。

イメージングも同様で、instax とインスタントカメラの販売、全世界的な販売好調で、売上利益とも計画過達でございます。

ヘルスケアは、為替影響を除きますと、売上は未達でした。損益的にも同じ状況でございます。

メディカルは、売上・利益とも計画以上でございましたけれども、先ほど説明にございましたけれども、バイオ CDMO で、おもにテキサスの拠点で中小型の商用品への、治験薬から商用品へのシフトを図っていく中で、いろいろな対応力の強化等を進めるために、一時的に停機をいたしました。意図的にです。そのためにその分の売上が未達、及び稼働損が一時費用として出てございます。

それから、遺伝子細胞治療薬は、予想したほどまだその市場の回復が来ておりませんで、その分も売上と利益の未達要因になってございます。従ってヘルスケアに関しましては、為替影響を除きますと売上・利益とも未達という状況でございました。

営業利益増減分析(1Q実績 対前年実績)

		1Q		対前年度	為替	原材料価格	一時費用	オペレーション等
		2024年 3月期	2025年 3月期					
ヘルスケア		103	34	-69 -67.1%	36	-14	-64	-27
エレクトロニクス		98	201	103 2.1倍	24	-4	-7	90
ビジネスイノベーション		166	144	-22 -12.9%	20	-14	-5	-23
イメージング		234	325	91 +38.9%	54	-5	4	38
全社/連絡調整		-79	-82	-3 -	-1	-	-	-2
合計		522	622	100 +19.1%	*1 133	*2 -37	*3 -72	76

(単位: 億円)

	2024年 3月期 1Q	2025年 3月期 1Q
米ドル	138円	156円
ユーロ	150円	168円

	通期
銀	-23
アルミ	-13
他(燃料等)	-1
合計	-37

	2024年 3月期 1Q	2025年 3月期 1Q	差異
ヘルスケア	59	123	-64
体質強化費用(CDMO)	-	50	-50
米子拠点における商用製造体制強化(CDMO)	-	60	-60
FHC国内営業部門統合費用(メディカル)	-	13	-13
棚卸資産評価減(CDMO/LS)	50	-	50
その他	9	-	9
エレクトロニクス	-	7	-7
新規買収会社(半導体材料)	-	7	-7
ビジネスイノベーション	6	11	-5
競争費用他(グラフィック*1st)	-	8	-8
体質強化費用等(グラフィック*1st)	-	2	-2
その他	6	1	5
イメージング	5	1	4
体質強化費用等	5	1	4
全社	-	-	-
合計	70	142	-72

*4 グラフィックコミュニケーション事業を「エレクトロニクス(旧マテリアルズ)」セグメントから「ビジネスイノベーション」セグメントに組み替えて表示しています。本区分変更にあわせ、2024年3月期の情報をリセットしています。

ヘルスケアの一時費用は、第1四半期の実績としましては123億円です。その内訳は25ページに載せてございます。

元々計画してございました中小型の設備、UK、アメリカの設備工場の構造改革で50億円、それから今申し上げましたテキサスの拠点で、非常に需要の旺盛な中小型規模の商用生産によりシフトしていくための体質強化費用で60億円。その他、旧日立メディカルの組織を統合する費用が10億円ほど出まして、120億円強になってございます。

芝野 [Q] : 2点目はCDMOに関して、FDB (FUJIFILM Diosynth Biotechnologies) の立ち上げの状況や追加の案件獲得等についてアップデートがあればお願いします。

飯田 [A] : FDB、デンマークのサイトへのご質問だと思います。デンマークの一次投資、6基の稼働の時期は、会計年度で第3四半期、カレンダーイヤーで2024年内を目標に、各種のバリデーションを推進しているところでございます。

商談状況は、中計のときに、昨年お示しているタンク図の通り、2024年、2025年、ここはフルキャパほぼ sold out の状態で、今 2026 年の商談を行っているところです。大手製薬会社様から、RFP などいろんな引き合いを活発にいただいております、2026 年のキャパの商談に入っている、そのステージでございます。

芝野 [Q]：最後、イメージングについて伺いたいと思います。instax もデジタルカメラも非常に好調なのかなと思います。またリテール見ていますと、sold、店頭においては売り切れで、欠品あるいはバックオーダーも取らないような対応を見ていますと、この状況が高原状態で 1 年間続くような感じかなとも思います。この辺の考え方、現実的なところとしてはどう捉えるのがよろしいでしょうか。既にパンパンかと思えますけど、それでもこのサードクォーターにかけては季節性もあるので、さらに上がると考えても良いのか。この辺の期待感についてお聞かせください。

後藤 [A]：今おっしゃったとおり、供給が追いついてないのが実情でございます。一つはデジタルカメラ、需要がかなり旺盛であることと、われわれの機能とかブランドが浸透してきたところで、最初から前機種より 2 倍の製造を予定して市場に出すなど対策しておりましたが、それでも追いつかない状況で、今それを一生懸命キャッチアップしている状態です。

その中で、律速となってくるのは、イメージセンサーであったりプロセッサであったり、半導体の製造を、半導体メーカーの中で入れ込まないといけないところが一つ。もう一つは、当社のデザイン性が優れているところにも関係あるのですが、カメラの上の部分。いろいろダイヤルとかがついている、X100VI はデザインがかなりレトロっぽいというので、人気を得ている部分でもあるのですが、外装部分の製造が(品位を出すために)切削などでハンドメイドに近いような形で、なかなか大量の量産がきかないところがあります。

ベンダーからの納期を早めるとかいろいろやっておりまして、皆様の手に入るようにそれは極力努めてまいります。

我々が考えているのはブランド力をつくる。特にレンズ交換式になってから、ブランド力がないと売れ続けないところで、CMOS センサーの大きさを変えたり、さまざまな機能、それからプロセッサを開発したり、やっております。このことはずっと続けてまいりますので、各社、機能の競争、画質の向上、それから今動画が結構ミラーレスカメラで撮られることが多いですが、その辺のあたりも競争によってまだまだ市場は広がると思っております。

一方、チェキですけど、これもフィルム供給でご迷惑をかけておりますが、今期秋口から増産が始まります。来年度 2025 年度にはフルキャパシティで増産となりまして、現状の 2 割増しのフィルムを生産する計画でございます。その後も増産の対策は組んでおります。

チェキ instax の場合は、一番大きい部分は、カメラもいろんな機種を出している。デジタルも含めアナログも含め、世界でいろいろ発売しているのが一つあるのですが、もっと大きな部分は Link シリーズのプリンターです。ここでもフィルムの消費量が圧倒的に多くなっている。

iPhone など携帯電話の写真の質が向上していますが、我々が出している Link というスマートフォン用プリンターに転送して写真をプリントアウトするときに、転送時間が昔に比べてかなり短くなっていることに加え、銀塩フィルムを使っているため、写真の奥深さが表現でき、高度な画像処理をそのままプリント上に表現できるところが、大きなポイントじゃないかと思っています。

我々は海外では”don't just take, give.”と、チェキ instax は撮るだけじゃない、人にあげたり飾ったり、そういうことがこの写真文化の定着と呼んでおりますが、そういうことを一生懸命進めております。ですから、スマートフォンでのショット数、おそらく今3兆ショットは超えているぐらいだと思いますが、その何%が出力されるかによって、このビジネスはかなり変わってくる。

それと、今いろいろ開発しているのは QR コードなどを活用したビジネス用途での使用もかなり今、上昇傾向にあるところです。

当面、まだ世界で売るところがたくさんあります。今世界1番アメリカ、2番ヨーロッパ、3番中国、それで日本、インドですけど、その他でもまだ増やすスペースは限りなくあるところで、当面、この上昇トレンドは続くと考えております。

司会 [M]：JP モルガン証券の若尾様、よろしくお願いいたします。

若尾 [Q]：CDMO 関連で三つお願いします。一つ目が今のマーケットの環境についてももう少し詳しく教えてください。今の芝野さんのご質問のお答えから大型設備、抗体等は受注堅調であると理解しました。一方で、Cell&Gene は思ったよりも弱いとのことですが、この弱い部分が御社の業績に与える影響はあるのでしょうか。あまり見込んでいないと思うので、そんなに影響ないのかなと思うのですが、この部分を知りたい。

もしご存知だったら教えていただきたいのですが、確か Lonza の決算では、それなりに Cell&Gene は回復してきているようなコメントもあったと思います。一方で御社の Cell&Gene が状況としてまだ改善が見込めないのは、どういった背景がありそうでしょうか。Lonza との違いみたいなのところでご説明いただけることがありますと、大変助かります。

飯田 [A]：まずマーケットの見方、環境は、おっしゃられますとおり、抗体の受注、引き合い、市場の伸びは堅調というところは変わらずでございます。Cell&Gene の影響については、元々私もバイオベンチャーのファンディングの戻りはまだ時間がかかると感じておりましたので、大き

く計画にも入れておりませんでしたけれども、受託が停滞しているところがあって、2桁前半億円程度の利益影響があるかというところでございます。

市場の Cell&Gene の戻りですけれども、案件は、それなりの数引き合いをいただいているようなところはありますけれども、その多くは Preclinical(非臨床)の段階のものです。案件の金額規模 1 件 1 件はあまり大きくなく、それらが入ってきたとしても収益にポジティブ、大きく貢献するところまでは至らないだろうというのが私どもの感覚でございます。

それらが治験のフェーズに移っていけば、それなりの規模感になると思うのですけれども、今の感覚でいきますと、案件の数はあっても Preclinical の小さな規模のものが多いのが実感でございます。

若尾 [Q]：ちなみに 2 桁前半億円のマイナスも、修正計画に織り込んでいらっしゃるのですか。

飯田 [A]：はい。今回の通期見直しには入れております。

若尾 [Q]：二つ目が、今回のテキサスの商用製造体制強化費用 130 億円についてです。そもそもこの中小型に切り替えるのは、期初からおっしゃっていたことだと思うので、この 130 億円も期初から見込めたのではないのかなと思います。第 1 四半期中にこれが必要になった背景をもう少し知りたい。

あとこういった CDMO の一時費用は、これでおしまいと見ていてよろしいでしょうか。昨年からの棚卸資産の評価減が出て、いろいろ一時費用が出てきているので、今後、またこういったことがないか気になるので教えてください。

飯田 [A]：まず今回のテキサスの一時費用の背景について、改めてまずご説明いたします。テキサスは、私どものサイトの中も比較的新しいサイトでございます。これが、コロナ期間中に大きく、急激に拡大した。設備も拡大したし、人員も大幅に拡大したことが、この数年来の中での動きでございます。

コロナが収束した後も、治験薬を中心に受託してきたのですけれども、ここにきて、来年度以降に商業生産に移行してくるプログラムが複数件見えてきました。その商業生産をやり切るところに対して、ここで一時的に停機を入れてシステムをクオリティコントロール、社内のシステムをアップグレードする、それに伴って人のトレーニングとか、一部システムのバージョンアップが必要となりまして、この費用を一時的に計上することとしました。

それによって 2025 年の商業生産の全プログラムを成功させる。そこでトラックレコード、実力をつけて、また次のプログラムを受託していくことで、2025 年、2026 年に向けて中計でお示しして

いる収益性の成長と収益性改善の確度を上げていくことがいだろうという判断をさせていただきました。

期首のときにある程度読めていたかは、もう少し短い期間の停機でおさまらと思ったのですが、商業生産をきちんと構えるためには、もう少し時間をかけてシステムのバージョンアップ、人のトレーニングをやる必要があるということで、当初想定したよりも長い期間の停機がここで入ったということでございます。

若尾 [Q]：一時費用はこれでおしまいと見てよろしいですか。

飯田 [A]：はい。一時費用は、昨年度はコロナ中に積み上げた部材の廃棄が出ました。当期 1Q では、需要に合わせた体制変更で構造改革を実施したことに加え、今回テキサスで一時費用を計上しましたが、他のサイトは比較的歴史もあって、商業生産、ライセンスを取ってきた実績も実力もあり、人材のトレーニングも十分できているという判断です。テキサスに限っても、ここで今年度に商業生産の体制を整えますので、今後、このような大きな一時費用が発生してくることはないと考えております。

決算ハイライト 2025年3月期 第1四半期 2025年3月期予想 参考資料

バイオCDMO収益性(1Q実績 対前年実績、通期業績予想 対前回業績予想)

一時費用除く収益性は、1Qは前年度並み、通期は中小型製造設備の体質強化効果により改善、黒字化を見込む

(単位：億円)

バイオCDMO	1Q			通期		
	2024年 3月期	2025年 3月期	対前年度	前回予想 (2024/5/9)	今回予想 (2024/8/7)	対前回予想
売上高	409	471	62	2,150	2,000	-150
棚卸資産評価減	-30		30			0
体質強化費用		-50	-50	-50	-50	0
米子拠点における商用製造体制強化		-60	-60		-130	-130
一時費用合計	-30	-110	-80	-50	-180	-130
一時費用除くEBITDAマージン	10%台半ば	10%台半ば	-	10%台後半	10%台後半	-
内) 大型製造設備	約30%	約30%	-	約30%	約30%	-
内) 中小型製造設備	マイナス一桁%	マイナス一桁%	-	一桁%半ば	一桁%半ば	-

若尾 [Q]：最後に、28 枚目で出していただいている数字からしますと、大型と中小型の売上の内訳は大体 6：4 と見ていて良いですか。他にもあるのかもしれませんが、これだけと考えると 6：4 で、中小型が多いような気がするので、そこだけ簡単に解説していただきたい。

あと今期の着地としては、営業利益ベースでは、これから推察しますと CDMO、赤字ですか。

飯田 [A]：デンマークの大型設備が立ち上がってくる初年度は、小さなバッチが多いことで、売上、収益貢献の面で影響が大きくないことから、この数字になります。出来上がりでいきますと、5 割から 6 割が大型、それ以外が中小という比率でございます。

若尾 [Q]：着地として、営業利益は赤字ということですね。

樋口 [A]：着地は、今期の一時費用が構造改革の 50 億円とそれからテキサスの商業製造拡大対応で 130 億円、合計 180 億円カウントしてございますので、その一時費用を除けば黒字ですけれども、それを入れますと、営業利益は今年度赤字です。

司会 [M]：UBS 証券の葭原様、よろしくお願いいたします。

葭原 [Q]：ヘルスケアで 2 点お願いいたします。1 点目はバイオ CDMO で、バイオセキュア法案について、新たな動きはなかったと思うのですが、ご説明の中で、引き合いは好調とコメントいただいていたので、バイオセキュア法案を含めて何か御社にプラスの影響などありましたら、その点についてご解説ください。

飯田 [A]：バイオセキュア法案について、法案自体は前回から大きな変化はない認識をしております。引き合いの件数としましては、バイオセキュアを背景として弊社にも引き合いは増えているかなというのは感覚的にはございます。今年度すぐ大きく収益に貢献するような成約はまだないですけれども、引き合いの段階としましては、バイオセキュアを背景にバイオベンチャー、製薬企業様に対する動きは出てきているのかなという感じはしております。

葭原 [Q]：2 点目は先ほどからいただいています遺伝子とか細胞ビジネスのビジビリティ、思ったより厳しいということですが、仮にこれから、金利の環境とか何か変化があれば、もう少し期待以上に改善していく可能性が高まるのか。今現状、お客様とのコミュニケーションの中でずっと悪い状況が続いていると思うのですが、ファンディングの状況が変われば、一気に変わっていくような考えを持っておいていいのか。

私の個人的な印象では、少しまだら模様といいますか、良いパイプライン持っているところは回復していくのかもしれませんが、なかなかそういう状況にもないお客様もいるのかなという印象もあります。現状の御社の感覚、お感じになっていることを聞かせていただけたらと思います。

飯田 [A]：そうですね、金利が高止まっている間のファンディングの全体の動きも前年と比べて、横ばい程度だと思いますので、あまり足元状況が変わってきている感覚は持っておりません。

ただ今後、アメリカの金利が下がっていくことでファンディングの流れが変わってくるとすれば、Cell&Gene はポジティブに反応していく分野だと思いますので、期待感を持って注視していきたいと思います。

葭原 [Q]：仮にその金利の問題が、今年のどこかで解消した場合、来年には明るい兆しが見えるとお考えですか。

飯田 [A]：そこの読みは難しいところでございます。ファンディングが戻って、先ほど申し上げたプレクリニカルから治験のフェーズに移ってくる時間軸を考えると、変わったとしても来年の後半とかぐらいの感じかなと思います。

葭原 [Q]：最後メディカルシステムでお伺いたします。非常にこの1Qは、全体的に好調だったと思うのですが、もう少し地域別のアップデートについてお聞かせください。

アメリカ市場については、同業他社からも非常にマーケットが好転してきているお話を聞いているので、この状況についても続きそうか。可能でしたら主要市場、ヨーロッパ、日本、中国といったところの病院の設備投資等のセンチメントについてもお聞かせください。

後藤 [A]：大体各社、私も発表を読みましたが同じぐらいの、地域別にも推移しております。

特に中国が、今まで成長市場のけん引をしていた部分であるのですが、1Qは中国の場合は、当社はほぼ横ばい、ただそれまでの伸び率から考えると、鈍化しているということでございます。

その理由の一つは、中国政府からの予算削減で、入札の数が圧倒的に減っている。二つ目は、腐敗防止で、かなり病院側もナーバスになりながら、あんまりこういうものが欲しい、こういうものを買いたいと手を挙げない。それともう一つは、当社の影響はそんなに大きくはないのですが、地産地消というか、中国内のメーカーが作ったものを推奨するという動きは、かつてより強くなってきたような報告を受けております。

日本は、もうちょっと予算がコロナのときは出ておりましたので、それがなくなって落ちるかなと思いましたが、日本もまだ昨年と比べて伸長しております。アメリカも他社と同様です。ヨーロッパも思いのほか悪くないのが現状でございます。

司会 [M]：現在も複数の方に挙手いただいておりますが、終了時間を過ぎましたので、大変恐縮ながら質疑応答のセッションはこれにて終了させていただきたいと思っております。

最後に今後の IR イベントについて二つご紹介いたします。まず 9 月 24 日の 17 時からビジネスイノベーションの事業説明会を開催いたします。

もう一つは決算短信の開示時刻につきまして、次回 11 月に予定している 2025 年 3 月期第 2 四半期より、従来の午後 3 時から 1 時間前倒しした午後 2 時を予定しております。これに伴い決算説明会の開催時間帯も約 1 時間前倒しする予定でございます。事業説明会並びに次回決算説明会のいずれも、詳細が決定いたしましたら改めてご連絡いたします。

それでは以上をもちまして、富士フイルムホールディングス決算説明会を終了いたします。本日はご参加いただき、誠にありがとうございました。

[了]

脚注

1. 会話は[Q]は質問、[A]は回答、[M]はそのどちらでもない場合を示す